駅伝男子 執念の走り 雪辱果たして掴んだ全国

北信越地区代表枠１を美方が獲得

結果を求めた大会 新メンバーで挑む戦い

県大会男子

十一月三日（日）、鯖江つつじハーフマラソンコースにて、福井県高校駅伝競走大会が行われた。朝の競技場には、本番を控えた選手達が引き締まった表情でアップする姿があった。応援に駆けつけた保護者達からも緊張した空気が漂っていた。

一区の平林清澄はスタートから鯖江、敦賀気比と抜きつ抜かれつの競り合いを繰り広げ、一位鯖江に十一秒差の三位でたすきを繋いだ。平林は「自分の力不足で良い順位で繋げられなかった。来年は鍛えなおして区間賞をとりたい」と悔しさを表した。二区の小山陽生は、区間一位（区間新）の好走で、敦賀気比と一秒差の二位で繋いだ。三区の小島大輝（区間賞）は首位に立ち、敦賀気比に三秒差をつけて、四区の佐々木涼介に繋いだ。しかしその後、敦賀気比に逆転を許すと、五区田鳥創太（区間賞）、六区木下詩音、七区小島優輝が懸命の走りを見せるもおよばず、結果は惜しくも二位。全国への切符を逃した。

三区小島から四区佐々木へ（県大会）

高原の好スタート（県大会）

県大会女子

一区の高原さくらはスタートから首位に立ち、軽快な走りを維持したまま二区の田辺愛奈へ繋いだ。鯖江が迫り来る中、三区の仲上碧美にたすきが渡るが、ここで鯖江が前に出る。四区徳山こころ、五区藤井結愛（区間賞）も力走するが届かず、二位でゴールした。藤井は「現状の結果の二位なので悔いはない。北信越でいい走りをしたい」と前を向いた。

北信越大会

十一月二十四日（日）、北信越高校駅伝競走大会が長野県大町市で行われ、十五校が出場した。県大会で悔しい経験をした男子チームにチャンス到来。今年の男子全国高校駅伝は七〇回目の記念大会であり、都道府県代表四十七校に加え、地区代表枠が設けられているのだ。今大会で地区代表になるためには、各県代表五校を除く十校の中でトップを獲る必要がある。

男子は満を持して、県大会からメンバーと走順を変更して挑んだ。一区小島大輝が七位で渡すと、二区の田鳥は四位、三区の平林で二位に上げ、その後も粘りの走りで繋いだ。結果は三位。地区代表権を獲得したのだ。また、敦賀気比に十三秒差で競り勝ち雪辱を果たした。男子キャプテン佐々木岳史は「県大会後、全員が悔しい気持ちを持って練習してきた。全国の舞台でも物怖じせず上位にくい込めるよう頑張る」と語った。女子は県大会から走順を変えて臨んだ。藤井、髙原が区間上位で走り、全体の九位でレースを終えた。堀監督は「男女共に力を発揮できて良かった。怪我で出られなかった女子キャプテン飯塚が、アンカーのラストスパートで一生懸命応援する姿が印象的だった」とした。また、選手に伝えたいことは「ＡＢＣ」。彼らにしか分からない暗号だという。

全国大会は十二月二十二日（日）、京都市都大路にて。

十一月新人戦結果

〈女子バレーボール部〉
予選　美方二一一藤島
決勝二回戦
武生東二一〇美方

〈剣道〉
男子団体　準々決勝
敦賀気比　一一一
（代表勝ち）美方
女子団体　三位

〈卓球部〉
男子団体　ベスト八
女子団体　五位
（シード権獲得）
個人戦　奥村妃奈
（北信越出場）

サッカー部紹介 目指せ初勝利

新人大会　対三国高校

サッカー部は二年生五人、一年生七人で活動している。少人数だからこそ部員同士の仲が良く、放課後のグラウンドには楽しそうに練習する姿が見られる。

そんなサッカー部だが、昨年は部員が足りず公式戦への出場を断念した。しかし、次の一年生が入ってくることを信じて練習を続けてきた。念願の新入部員と共に初めて臨んだ今年九月の選手権大会は、怪我人もあり九人での苦戦を強いられ、大野高校に〇対二十一と大敗。そして二人の助っ人を招いて挑んだ十一月の新人大会は三国高校と対戦した。一対一〇で負けはしたが、全力を出しきり、待望の得点も上げ、今後に活きる戦いだった。

目標はこのチームで初勝利を掴むことだ。そのために「今後は体力と協調性を課題にして練習に励む」とキャプテン繁田智弘さんは語る。顧問の本城先生は「初心者が多いチームだが一人一人目標を持ち、懸命に取り組んでほしい」とエールを送る。今後の活躍に期待したい。（渡辺治紀）

沖縄研修旅行事前学習　平和講話 忘れてはいけない 戦争がもたらすもの

一言一言力強く話す

十一月六日、沖縄研修旅行の事前学習として平和講話がシアターで行われた。講師は三年連続となる高山厚子先生。「美方高校に来ることを楽しみにしていました」と挨拶された。高山先生は幼い頃に沖縄戦に巻き込まれており、戦争の悲劇を若者に伝える活動をされている。

前半は沖縄の文化、産業、自然について語られ、研修旅行に期待が膨らむ内容だった。

後半は米軍によって撮影された資料映像から始まった。雨のように降ってくる砲弾やガマへの攻撃など、目を覆いたくなるものだった。そして、高山先生は沖縄戦を語り始めた。当時の沖縄は、米軍の本土上陸を少しでも遅らせるための防波堤とされていた。そのため多くの住民が徴集され、中には十代の少年少女も含まれていた。また、住居や食料を没収された多くの住民が亡くなった。さらに、米軍の攻撃が始まると、その凄まじさで地形が変わってしまうほどだったという。首里城の地下には大きなガマがあり、日本軍の本拠地が置かれていたが、ここも跡形もなく破壊されてしまった。戦後も病気の蔓延や食料難など、沖縄の悲劇は終わらなかった。それでも沖縄の人々は、前を向いて進んできた。失われた文化、産業も復活させてきた。講話の最後に高山先生は、研修旅行で訪れた地をただ通り過ぎるのではなく、沖縄の訴えや叫び声を聞いてきてほしいと願いを込めた。

講話の後、高山先生にインタビューをした。平和講話をする理由は「故郷に想いがあり、自分の育った文化を伝えたかったことと、戦争を体験した人が伝えなければならないという思い。また研修旅行に来てくれる生徒の皆さんに感謝を伝えたかったから」と話してくれた。また、先日の首里城火災について伺うと、悲しさを通り越してやりきれない気持ちでいる、と辛そうにしながらも、「首里城には四五〇年の歴史があり、平和も混乱の時代もあった。首里城は中国にも日本にもない沖縄独特の造りで、沖縄県民の心の喜びや悲しみ、誇りが込められている。歴史を遡ると首里城は四回焼失している。しかしその度に復建し、そのこと自体が沖縄の誇りになっている。戦後の復建時には沖縄全体が喜びに溢れた」と語り、五回目となる焼失からの立ち直りを祈っているようだった。（品野康紀）

悲劇を忘れないように